

■蜂須賀正氏 自家用機で飛び回り、世界の辺境を探検するなど、型破りの侯爵鳥類学者で、スキャンダル記事も絶えず。

はちすかまさうじ
日比谷公園・1903＝

東京で、旧徳島藩の家祖蜂須賀小六から18代目として、徳川慶喜の側室の四女を母に、末子に生まれる。

日露戦争終・1905＝ 2歳：

祖父は最後の藩主として明治維新を迎え、イギリス留学後、開明派として要職を歴任、父もイギリス留学し、のち貴族院副議長をつとめる指折りの名家に育ち、

明治天皇没・1912＝ 9歳：

幼時から昆虫の観察やカエルの解剖に熱中し、

本格政党内閣1918＝15歳：この頃、*学習院中等科の理科教師から手ほどきを受けて、鉄砲で鳥撃ちに出かけるようになったが、やがて、5万坪もある広大な屋敷に金網を張って、様々な種類の鳥を飼うようになるとともに、
ハチカ条約・1919＝16歳：学習院の先輩で鳥類学者黒田長礼侯爵と出会い、鳥類学会に入会。息子の奔放さに手を焼いた父の命で、
大暴落・・・1920＝17歳：イギリスのケンブリッジのカレッジに留学すると、早速鳥好きを集めて、鳥学会を組織。

原敬首相暗殺1921＝18歳：

関東大震災・1923＝20歳：

治安維持法・1925＝21歳：

ヨーロッパ復興とともに復活した探検熱にとりつかれ、エジプト探検を敢行、珍鳥を撃落して持帰る。
友人と{ケムブリッジ動物学探検隊}を組織して、アイスランドへ鳥の採集旅行に出る。

円本時代始・1926＝23歳：

金融恐慌・・・1927＝24歳：

共産党事件・1928＝25歳：

世界恐慌・・・1929＝26歳：

海軍軍縮条約1930＝27歳：

満州事変・・・1931＝28歳：

五一五事件・1932＝29歳：

国際連盟脱退1933＝30歳：

帝人疑獄事件1934＝31歳：

芥川直木賞始1935＝32歳：

英国鳥学者クラブの会合で、大銀行家の鳥類学者ロスチャイルド男爵らの絶滅鳥の研究発表を聞いたことが、さらにのめり込む契機となる。卒業論文には架空の鳥鳳凰の研究を書き、
モロッコなど北アフリカを専用自動車で走り回った後、新進の鳥類学者となって帰国。
提案していた日本生物地理学会が創立される。
フィリピン の最高峰ミンダナオのアボ山の鳥類調査に出、ヤシ園の経営者山村樗次郎の縁で、帰国後その娘で麗人博物学者と話題を呼んでいた八重子と出会い、親交が始まるなか、
*再び渡英する。飛行機に取り付かれ、軽飛行機のクラブに入って、A級ライセンスを取得。
ベルギー政府が派遣したコンゴ探検隊に参加、大英博物館等のため、ゴリラの巣を持帰る。
軽飛行機での帰国計画許可を得るも、リビアで不時着事故を起こし頓挫したが、父が死去したため、
急速帰国して爵位を襲い、自動的に貴族院議員となる。父が莫大な借金を残していたため、一族が家宝を売却するなか、高価な飛行機を買入れ、諫めにも耳を貸さない不行跡に、華族を監督する宗秩寮が内偵、
悪友や女性と関係遮断するため、愛機が陸軍に献納された上、外遊させられてしまうが、
ロンドンから軽飛行機でブルガリアの皇室を訪問。「フィリピン産鳥類」を出版後、アメリカ経由で帰国途中、病となり、ロサンゼルス近郊のパサデナで療養しながら、絶滅鳥ドーダーの研究に着手し、論文「ドーダーとその一族」を書き上げてカリフォルニア大学で発表、特異だったため本にすることになったが、

日中戦争始・1937＝34歳：

第二次大戦始1939＝36歳：

日米開戦・・・1941＝38歳：

創価学会検挙1943＝40歳：

日中戦争勃発で、中断して帰国し、熱海の別邸で校正を進める一方、
アメリカ滞在中に知り合った日本人農園経営主の娘と結婚、
完成した原稿が何とか戦時下のロンドンの出版社に届いたが、
長女が誕生。日米開戦となり、控えの原稿で国内出版を試みるも、印刷会社社員が次々応召となり、
「南の探検」を著す。

敗戦・・・1945＝42歳：

新憲法公布・1946＝43歳：

極東裁判判決・1948＝45歳：

朝鮮戦争始・1950＝47歳：

独立回復・・・1951＝48歳：

メーデー事件・1952＝49歳：

TV放送始・・・1953＝50歳：

空襲で工場も焼失し、ご破算となる。戦時中、軽飛行機で国外脱出を試み、
*家宝の白金等を国外に持出し、国家総動員法違反に問われて、侯爵を返上。
GHQの野外生物課長に赴任することになったアメリカ海軍軍人で鳥類学者のオースチンが熱海別邸に来訪、日本鳥学会の機関誌{鳥}の編集に当たりながら、次々と女性を連れ歩く一方、山村家との親交は続き、
樗次郎を見舞っている。
「世界の涯」を出版。ロサンゼルスに別居中の妻との離婚訴訟が長引くなか、
東京芝の本邸がオーストラリア政府に売却され、のち同国大使館用地となる。
*狭心症で没した。直後にイギリスの出版社から「ドーダーとその一族」が出版され、北海道大学から理学博士号が贈られた。